

1章 はじめに

Introduction

このたび、多くの方々のご協力により「レッドデータブックとっとり第3版 2022」をお届けできるようになりました。鳥取県域に生息・生育する絶滅のおそれのある野生動植物を解説する「レッドデータブックとっとり（動物編、植物編）」が初めて発行されたのは2002年のことでした。その後の変化や生物調査の進展に基づいて不断の検討が続けられ、2012年には各分類群を統合して一冊にまとめた「レッドデータブックとっとり改訂版」が発行されました。そして前版から10年を経て、再び全面改訂されたのが本書です。

レッドデータブックとっとり第3版 2022の改訂作業はちょうど新型コロナウイルスのまん延時期にあたり、移動をとまなう調査や対面での検討は大幅に縮小せざるを得ませんでした。特に県外の専門家に依頼した現地調査は実現しなかったものが多く、分類群によっては改訂作業に大きな影響を与えました。このような困難を乗り越え、一層充実した第3版 2022の発行にたどりついたことにほっとしています。改訂に関わっていただいた全ての方々に深く感謝申し上げます。

第3版 2022の発行にあたり、レッドデータブックととりが果たしてきた役割と課題について考えてみました。都道府県版のレッドデータブックは、その地域において保全活動等を行う際の情報源として活用されることが第一の役割だと思います。その最もわかりやすい例は、道路建設や河川改修、発電施設など開発規模の大きな事業にともなう環境影響評価（環境アセスメント）の場面です。環境アセスメントでは事業の検討段階で環境保全のために必要な配慮について検討が行われます。既存の調査報告などに基づく検討の中で、生物に関しては事業実施地域とその周囲に生息・生育する可能性のある絶滅危惧種や重要種のリストアップに、このレッドデータブックが重要な役割を果たしています。続いて現地で生物調査がおこなわれ、当該地域内の種の生息・生育状況が明らかにされるとともに、事業がレッドデータブック掲載種の生息・生育に与える影響とその軽減・回避策が検討されます。国内では、生物多様性基本法の公布（2008年）や生物多様性条約第10回締約国会議（2010年、名古屋）の開催を経て「生物多様性の主流化」に向けた活動が活発化し、国連持続可能な開発目標（SDGs、2015年）の採択とその認知度向上も後押しとなって、絶滅危惧種の保護や生物多様性維持の重要性が広く社会に浸透してきています。絶滅のおそれのある野生動植物や重要種がみつければ、事業の中で影響の軽減・回避や保全策を講じ、事後のモニタリングまで行う流れは確かなものになってきました。レッドデータブックがもつ重要性は増しており、今回の改訂でもできるだけ多くの情報を集めて慎重な検討が行われました。

生物多様性の維持にむけて、絶滅のおそれが高く特に保護が必要な生きものに対しては積極的な保護活動が必要

です。鳥取県では2002年にレッドデータブックととりに作成したおりに、「鳥取県希少野生動植物の保護に関する条例」を制定し、レッドデータブックの評価を基盤にして動物8種、植物33種が鳥取県特定希少野生動植物種に指定されました。指定種はその捕獲・採取が禁止され、保護管理計画が立てられます。種の指定だけにとどまらず、予算措置を講じて継続的に保護活動をおこなうこの取り組みは先進的で、地域の生物多様性全般への関心を高める効果もあったものと思います。このたび、レッドデータブックとっとり第3版 2022の内容もふまえてこれまでの成果が検証され、指定種の見直しが行われました。レッドデータブックは希少種の保護管理とつながっています。

レッドデータブックの発行そのものも、地域のみならずの野生動植物への関心を高めることを意図しています。レッドデータブックととりは絶滅のおそれのある野生動植物に興味を持ってもらいやすいよう、今回も全掲載種の写真を掲載しています。折しも鳥取県では2020年春に「鳥取県生物多様性地域戦略」が公表されました。レッドデータブックは、生物多様性への興味関心を高めるとともに戦略を裏付ける基盤資料として、生物多様性地域戦略の推進に重要な役割を果たします。

レッドデータブックととりには課題もあります。改訂のたびにできる限りの努力はしているもの、カテゴリー評価の精度を向上させ、種の解説内容をより充実させていく必要を感じます。そのためには生息・生育情報の充実、つまりそれを支える調査者の厚みが重要です。しかし現実には高齢化や現役世代の多忙化などにより調査者は減っており、県内に詳しい方がおられない分類群が増えています。近県の方をお願いするにも程度が異なるだけで事情は変わらず、今後ますます調査不足の問題が深刻になっていくことが懸念されます。そんな中で今回のレッドデータブック改訂では裾野を広げ次回改訂も視野に入れてなるべく新しい方々にも調査・執筆にかかわっていただくよう心がけました。若い世代の執筆者が加わった点は明るい展望です。社会における生物多様性への関心の高まりを調査者の養成へとつなげ、地域生物相の実態解明をますますすすめていかなくはなりません。

レッドデータブックととりは、多数の調査者・執筆者の生きものを思いやる気持ちを集めて編集されています。読者のみなさまには、個々の写真や解説文から関係者の努力や苦労も感じ取っていただけたら幸いです。こうして完成した「レッドデータブックとっとり第3版 2022」が初版、改訂版と同様に、鳥取県の野生動植物と生物多様性の保全のためのさまざまな活動・取り組みに、大いに活用されることを期待しています。

（著者を代表して 永松大）